



小学校の思い出

坪見博文

★林キヨコ様 八五歳 一〇日  
いらっしやいませ

思いめぐらし

帯賀信義

新緑の七曲りの坂道を越えれば、笑顔いっぱいのかわいい子らが待っている深小学校へ通いはじめたのはあの四月、それからもう十年になるうと、思っています。昨年十一月十八日に、高崎壽郎先生が教育委員会においでになり「ふかまの歴史」という冊子をお届けくださいました。

い教職員が支えてくれたこと。教職員が一体となつて、子どもの教育にあたることのできるのには、子どもにとって幸わねなことがあるわけだ。『やればできる』という力が生まれたのではないかしら。深の子どもたちは、小さい子どもです。仕事で小学校、幼稚園におじゃますることがありますのでよくわかっていきます。

昭和二十一年四月 呉市広町石内小学校に入學。父が満州から復員して二学期頃、豊田郡(現賀茂郡)河内町立河内小学校に転校。四年生頃まではよく覚えていない。五年生の時、校舎の建て替えが始まった。一階の旧校舎を四、十メートルくらい東に移動する時、私達は床の下で根太の下に直径五センチくらいの丸棒を運んだ。勉強の時間は半分くらいになった。それが毎日楽しかった。

私が深小学校へ就任して学校の現況をふまえて、地域に開かれた学校づくりをすすめることが課題とらえ、教職員と共に取り組んできました。PTAの皆様をはじめ地域の皆様が学校教育の推進にたいしてご理解とご協力ご支援をいただいたことはとても幸わねなものであります。その陰には、すばらし

中国の旅ごぼれ話 (三)

西安の朝のようす 高崎壽郎

中国の首都北京は、自動車の洪水や建築ラッシュで活気に満ちている街のようすがよくテレビで紹介されるが、古都西安(昔の長安)はまだそこまでいっていないようだ。十月四日朝六時半、あたりが白み始める。私はホテルの窓から下のアパートをみていた。

深町には輝く人がいます。一人では輝けないし、生きられませんが、生きることに楽しさを感じ、人々が生き生きと生きているのを見て、心豊かに成長してきています。誇りに思い、深の町をこよなく愛する人間になって欲しいと願っている一人です。私も深が好きです。深の人が好きです。

先日NHK「青年の主張」で北海道代表の人はニッカポポンをはき大工をしている。大工以外のことは何もわからないが、日本一の大工になり、人間国宝になりたいと話されていた。私の小学生時代は、勉強以外のことが大好きな毎日だった。

町民の皆様

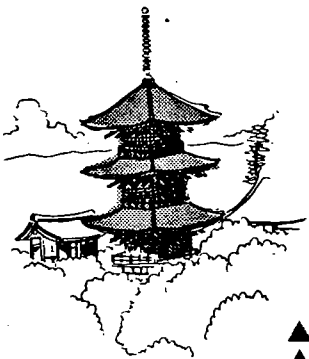
三原市立幼稚園 小笠原 平野 智雄  
同 PTA 会長 藤川 敏和  
同 同 福地 隆 藤原 久恵

「新春ふれ合い広場」のお礼

次の朝早くホテルの付近を散策した。朝霧の中、三三五五悠々と太極拳をやっている。歩道を清掃している者もいる。やがて始まる喧嘩な生活前の静寂な一ときである。

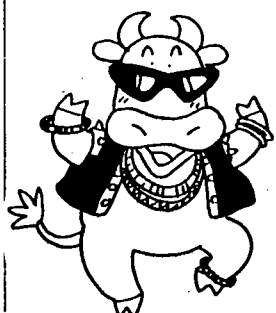
平素は、学校教育並びにPTA活動に格別のご協力をいただき厚くお礼申し上げます。さて、去る一月十二日の「新春ふれ合い広場」行事挙行に際しましては、お忙しい中を多数の参加をいただき、盛況裏に終えることができた。深く感謝いたしております。このような行事を通し、地域と学校の絆を深めたいと思っております。ご協力ください。

同じころ、ホテルの正面にある自由市場は朝の準備に大忙し。八時ごろにはもう人で一杯だ。一般の商店もこのころには店を開いている。



「ふかまのまど」毎月発行で三十四(通算四十四号)号になりました。町内会連合会が平成五(一九九三年)四月に結成され、初代会長 高崎 修様の提案で、町内各々の団体がどのよう活動しているかを、広く町民の皆さんに知ってもらおう目的で「町民活動記録」としてスタートしました。

「ふかまのまど」として地域内の声を載せ始めたのが一年後の平成六(一九九二年)五月からです。編集方針は、①地域情報を記録する ②たくさんの方の意見・想いを載せる ③深町と関係のある人・ある人にも門戸を開く ④転居して来られた方の新鮮な視角を大切にします。▼多数の方のアドバイスをいただき現在に至りました。特に前記高崎様、小林徳蔵様からは貴重な指導を受けました。マンネリ化防止のためにも、皆さんの助言・批判・アイデアをお待ちしています。▼深町に足跡を残してください。暖かい想いの記は心とわも心の底に残る、深町を去っても心広く 深い町でありたい。



- ◆小学校(幼)
  - ▼三原市子ども美展 一、四日
  - ▼冬期学園(五・六年) 六・七日
  - ▼集金日 七日
  - ▼貯金日 一〇日
  - ▼新入園児保護者会 一九日
  - ▼教育講演会 参観日 二〇日
  - ▼児童会役員選挙 二二日
  - ▼新一年生入学 参観 二七日
  - ▼女性会 上 二二日
  - ▼親睦会 中 二二日
  - ▼役員会 下 二二日
  - ▼神明祭警備 七日、九日

展望

「ふかまのまど」毎月発行で三十四(通算四十四号)号になりました。町内会連合会が平成五(一九九三年)四月に結成され、初代会長 高崎 修様の提案で、町内各々の団体がどのよう活動しているかを、広く町民の皆さんに知ってもらおう目的で「町民活動記録」としてスタートしました。

# 校舎と共に(十二)

とんど

石井哲代

近頃は各地で、とんど行事が大々的に行われています。うれいことです。今年も深の下組のとんど槽を見ました。とても立派にがっしりと組まれていました。上組でも中組でも立てられていたことでしょう。ふかま

うに屋敷の前の小路を帰っていた風景。県道をふさいで前の橋を帰ってきたあの風景と、あのエネルギーは、寒さなどはねのけていたと思います。大きな竹が四・五本校庭の真中に揃うと、全校で裏山へ行きとんどを飾るための赤い実のついた小枝や緑の濃い木の枝、うらじろなど葉もの、そしてよく燃える為の枯れ枝や枯葉など集めるのです。材料が揃ったところで男の先

指を折ってみると二十年、正月の伝承行事として、とんどを始めたのです。近所の家々から大きな竹を切ってもらい、放課後全員でエンヤ エンヤ と担いで帰りました。根元の重たいあたりを担いでいたあの年の六年生、この年の六年生の男の子の姿が顔の汗と上気した顔と共に見えてきます。枝先や葉先を握んでいるだけでも深小の一員である自覚に満ちてエンヤ エンヤ と掛け声を響かせていた低学年の女の子の笑顔の姿もみえます。大竹のエネルギーが発散するよ

## 特集

子どものみた とんど

### 「地域のみなさん、ありがとう」

(一)

四年 河原美穂

私は、材料の竹やげん木をうら山からはこぶとき、「どんなとんどができるかな。おじいちゃんたちが言うとおりとんどすると、ずっと元気でいられるかな。」と、言いながらはこびました。

しいたけのげん木を運ぶとき、おもたくて、手がちぎれそうになるし、手が熱くなりました。げん木や竹などを、どんどんがんばって運ぶと、あつとゆうまに運動場に竹や、げん木などの山がたくさんできました。

おばあちゃん、おじいさんたちががんばってたててくれたのでうれしかったです。この一年、元気で字もきれいで、勉強もよくできるよすがががんばりたいです。▲▲

(二)

四年 宮本恵太

深小のみんながあつめた材料や、地いきの人たちが持ってきてくれた材料で、りっぱなとんどが作れたらいいな、とぼくは思いました。

さいしよは、とんどのほねぐみを四方からひっぱって、たてました。そのときほくがひっぱっていた所がほくけて、しりもちをついてしまいました。それでおとなの人たちが、おし立てました。それから、わらをとんどにかぶせました。それからおとなの人が上へ上がって、よぶんなところを切りおとしたりしていました。その次にげんぼくや、まつのきぎれをとんどの中にいれまして、それからしめなわなどをつけておわりました。立っばな大きなとんどができあがり、つかれたけどとてもうれしかったです。▲▲

(三)

四年 綱掛 茜

三、四、五、六年生で、とんどの材料集めをしました。

竹の葉と葉が、ザラザラゆれて運びにくかったです。こんなに苦勞して運んで作ったとんどが、すぐに焼けてくずれてしまふのは、少しもったいないようなかざっておきたいなと思ひました。帰ると、おばあちゃんが、「とんどの用意をしていたから、

さしもの大とんども燃え尽きた時、待ってましたとばかり持参の餅焼きです。へえーそんなに？ と声が出そうなる程の餅が並びます。軍手と餅焼きのお手袋も二つも三つも入りそうな軍手をはめて黒焦げ餅を、ふーふーしながらひっくり返していただきます。熱灰にまみれたお餅の灰を、ふーふーとはたいいていきます。上気した顔には煤や灰の化粧です。家から持ってきた醤油や砂糖をつけて頬張る。かたまりの輪がいくつもいくつもできておきます。とんど用にお餅をとっておきますよ。と話すおかあさんの言葉に、手放しの親心と温もりを聞いたものです。地域に根ざした営み、そして学校あげて、地域をあげての行事の中に子どもが育っている。それが伝統の力でしょう。今年も力強く燃えたであろうとんどに、大きな拍手を送ります。▲▲

(四)

四年 宇江 篤

とんどの材料は、地域の方からもらい、みんな竹やぶから竹をとってきたり、かれた木や、松の木切れを運びました。一回目は、立たずにこけました。でも、二回目に、みんなひっぱって成功しました。そのあと、四人の大人の人が竹の高い所へ上がっている人を見て、勇気があるなあと思いました。そして竹が曲がっていたので、こわくないのかなあ、と思ひました。みんなの力が合わさったからできたんだと思ひます。おじいさん、おばあさん、ありがとうございます。▲▲

(五)

四年 西永 雄一

おもちをつくるときに、きねとおもちがくっついて、きねをもちあげるときもかかったです。一人五回ずつつきました。千葉先生が水をかけてくれました。次に、おもちをまるめる時にきれいにできるかなあと心配でした。それで、千葉先生から、おもちをもらってまるめると、きれいにできました。やおくでぬくぬくで、きもちよかったです。▲▲

少しは手伝わないとおもって、運びに行ったんよ。」と教えてくれました。

わたしは見えない所でも、地いきの人が、がんばっててくれたののだなあと思ひました。▲▲

☆ 九六年に来たおともだち  
一年 井手上大輔 齋藤秀平 松岡良貴  
二年 綱掛 茜 池田 悠  
三年 井手上大輔 齋藤 悠

児童数の変遷

年度	児童数
九二年	五二
九三	四八
九四	四七
九五	五九
九六	五九
九七(予)	六六

学年

九六年	一
九七年	二
九八年	三
九九年	四
二〇〇〇年	五
二〇〇一年	六

ふじ川のおじいさんと、おばあさんがお米をそだててくれて、おもちができてうれしかったです。おもちが食べられるようになるには、長くかかるし、たいへんだなあと思ひました。▲▲

(六)

四年 西永 隆典

「パチパチパチ」大きな音をたててもえていきました。見る見る間に火が大きくなって、空へもえあがりました。けむりもすくすくいっばいでした。

その次に、おもちを焼きました。それでおもちを食べました。つきたてのおもちはとってもおいしいな、と思ひました。次に、体育かんで、バザーをしました。それでぼくは、フランクフルトと、ウドンとたこ焼きを食べました。それで、おかしとおもちを買ひました。おいしかったです。たのしかったです。▲▲

(七)

四年 中島 千紗

とんどの灰のかたづけを月曜日の一時間に四、五、六年生でしました。わたしは、初めに小さなバケつでうら山にはこびました。わたしも重たかかったけど、みほちゃんとかかちゃんも、もっと重そうでした。わたしは、みほちゃんにわたしの持っていたバケツをわたしました。わたしは、あかねちゃんと二人で重いのを持っていました。みんな重たい重たい、といひながら行ったり来たりしてがんばって運びました。やっぱりお母さんがいつも言うように「かたづけしなさい」と言うのは、きたなかつたり、あぶないからあたりまえだと思ひました。

消防のおじいさんが、火事にならないように守ってくれて、水道で消してくれたので、みんな安心して楽しいとんどになりました。▲▲

お婆 婆の方言は替へ言は替へ言は替へ